



俳諧古今抄  
 新製東花式  
 星之五

中村俊定文庫  
 文庫 18  
 206  
 5





他諸古と抄卷之下

再授東文と式序

蓮二序



むしりたるの建さうふと仰祈のせし余巻  
虚なくとと志やふく初善と橋陣如の  
實一はりかみ儒書の内百余年章七実子く  
ととと一へあく懲悪と纏悲子の二世以る  
初懲とと一も時の要とせとて一虚と一虚  
ハ実も実あつても世とと変通寸と方とん  
ある一はく他諸のるるや和号連二序の序



と汲あうと云々とおぼやかしむる事と云ふ事  
罪ともしてはとやうして、  
もろいにて二程の増と云ふ事と傳傳の  
いせき人との連能の家と云ふ事と云ふ事  
虚言と自在なれと云ふ事と云ふ事  
けなす事と二冊と云ふ事と云ふ事  
の生る事と云ふ事と云ふ事  
いゆわつと云ふ事と云ふ事  
ちりちりたる事と云ふ事  
の事と云ふ事と云ふ事

ある一書として同録と云ふ事と云ふ事  
ある事と云ふ事と云ふ事  
の新制と云ふ事と云ふ事  
二様に取捨と云ふ事と云ふ事  
の設と云ふ事と云ふ事  
辭と云ふ事と云ふ事  
おひては、  
と云ふ事と云ふ事  
西成と云ふ事と云ふ事  
孝との刑と云ふ事と云ふ事







と雲ひ遠く百世の如盤まやうやよと我は海に  
おろれてはとまむく海ははくまておれぬ  
ゆんやうう享保巳酉の秋八月十六日付  
序文とま行一て文皇觀の塔前の教一  
て甚難誦再おとらおれと也

東花式目錄

大段十二箇條  
小段五十五條

一花ノ様也事

- 幸崎のむし山標の事
- 花ノ様人の事
- 藤葉集ノ鮎の標の事
- 猿蓑集ノ糸標の事
- △ 富士北野ノ標の事
- △ 標ノむしらの事
- △ 岩根の花ノ標の事
- △ 二句一意の花也
- △ 春秋の花ノ差子の事

一月に月ノ早也事



○ 宵闇に月と合する ○ 月名は月の事  
 ○ 月名に於て設ける ○ 月名に於て設ける  
 一 月名に於て設ける

△ 前向より月と合する  
 △ 月より前向より合する

一 月名に於て設ける

△ 月名に於て設ける  
 △ 月名に於て設ける

一 儀式の席に於て設ける

△ 二字の起るも各の事 △ 面白類白の事

○ 屏風のたし草子合の事

一 當季の物名に於ける

△ 玉に美言の事 △ 梅中坊の事

△ 松虫の句法ある事

一 五七の字を詠に於ける

○ 五七の字に於ける附合の事

△ 五七の字に於ける

一 越前への句作に於ける

○ 幸崎の松の様のある事  
 △ 美入の曲節地の事



一 附合し七名八躰此事

有心 會款 道向 起情

○ 向附 柏子 色立

右七名八案方ニテ對附八員外ヲ

△ 其人 其場 時分 時節

時宜 天相 觀相 面影

右八躰八附方ニテ空接八員外ヲ

一 懷中し名同此事

○ 百韻 七十二條 源氏 五十韻

四十四 奇仙 首尾吟

一 求韻し向お此事

○ 源氏行 ○ 奇仙行

△ 長歌行 △ 短歌行

一 同季ハ三句去一々ヤ此事

○ 奇仙の遺訓ハ二花二月の例あるヲ

○ 名残の裏ハ春秋二句の例あるヲ

右と抄序目終



新制東文卷式

星五

一方法一例序

東文坊

はらく古今の法をとりよし仰神と飛通別圓の  
 法あれは儒書と礼と書教の式ありてかこころを  
 又百の戒律とまじりてこころを威儀とまじり  
 ともなうとせらるるとはあふ人の修けの時とす  
 一まじりて書教の功とはこころを正しと時とまじり  
 時とらるる縦横自在とてこころを離れぬ  
 一はこころを正しと書人の書通とてかこころを

ある一とあれは老花揚の言のるしは号連能  
 とはあふ人の心と書教と書人の心と書人の心と書  
 とあれはこころを正しと時とまじりてこころを  
 名人のよき書の法はちりて一とまじりてこころを  
 いはれ家礼のるしと書とて一と書教のむし  
 各とはこころを正しと書人の心と書人の心と書  
 の各のるしと書人の心と書人の心と書人の心と書  
 七言の法下と書人の心と書人の心と書人の心と書  
 の各のるしと書人の心と書人の心と書人の心と書  
 といひてこころの優格とせらるることとくち書



いけ能清といらなり我神の和光とてあまの御魂  
 といれといもるはとらむも式とまゝの御魂  
 の可い言ふ能觸してははの御筆といらまら  
 してつれと連音せぬ家とありては母の新式  
 と録形とあたらより例と御書信のちらむ  
 して一歩子とせまらひといあねりありて我ら  
 能清とい十余年の新制ありて能清の御魂  
 とい久きあられといはたよとい句の御書信とて  
 指合を嫌のほとさるより古式の論をいりて  
 あらといりてはれといはぬの設といりてはれとい

加るのりといはれといくたて能清の御魂  
 記向の藤子よといり或の書神の實美と夫  
 いて孫と暗記といり能清の御魂といり  
 え祿の中比より實美の御魂といり能清の連年  
 とそいありまらり能清の御魂といり能清の御魂  
 能清といきといはれといりて能清の御魂  
 一といはれといはれといりて能清の御魂  
 とあるといはれといりて能清の御魂  
 能清の御魂といりて能清の御魂  
 能清の御魂といりて能清の御魂  
 能清の御魂といりて能清の御魂

神皇正統記

廿



新制の形も亦と俳諧の言偏りて俣よけり  
俳諧の人偏りて漢の言よれりは或は  
不制あるとて此も格の不用の形ありん  
月に雪にむらさきのあけは月く  
あくたそむきをせ設あんとせれき  
新式のを懐りて敷の言はれりて同所  
不用の用とされとて恒時寶永に  
十月十二日ぬしの靈前とせ福とさけ  
炬火  
振巻の信とせくして百世の真傳と  
まゝのめや

新制衣東文七式

○花と梅此事

花もくは新の月也のりては  
糸物といひもて此飾をなれり  
五節よあそびて此例の舞美と  
てくもるは新音を求へり  
白馬の遺訓ありやあつらひに  
花と梅と所るるを梅子と梅  
は名るは天所の物なりて梅  
の美不



古今抄

九



とあるれとよめくこみ跡と師とまらめい  
いふふと自知より著されせけぬ一冊と  
ぬみよと夕彦の泣句とあけ次よ我書よの  
鴉鳴とあけ次よ百世の設よ使あんとて  
例の案議し用捨よと一

○ 幸崎のねらむより勝る

山と様と志ゆる とき雨

け着白く湖南のまきらよあて今とてい句とて  
泣まらよ及つとてあらにけ服の山様とて時の  
実と涙よも崎まねとむとつひらよと雨の様と

つる花と様の子様と志れと我他いよは様  
いむしと心寺の山様とるる下

○ 詠より花よいししそめ書

かきけてぬる 山様人

けすると檀林の能活せまると中古此泣句  
よ此の能抄よ書はとて例の古凡のい  
ふれい今此能活の漏よなまて世よも様くと  
僧妻糸の名目ありしと人よと花よきとよれ  
とと様れんぬとあつたりあて花よ様のい  
不祥の秘訣しよよまき也



○ <sup>新句</sup> 本のりしとけし強も様うふ

○ <sup>花府</sup> 新部らむむの盡北一乃田

○ <sup>前句</sup> 志し強く水は菖の枝より

○ <sup>花府</sup> 新様版一たひは笑よきり

けり句となおの遺訓也ふの様と新集此多句  
<sup>三</sup>く初折の花は<sup>二</sup>ふ花あり後の様は  
集の所今<sup>一</sup>く初折ふとふ花ありて今此  
多様と名残の曲節也ある日本書紀此  
<sup>二</sup>何り<sup>一</sup>系詠は<sup>二</sup>集の撰おと<sup>一</sup>きりれは  
い例の若しく<sup>一</sup>すや我家のふ花論は

様よあも様よあも<sup>一</sup>も何れも言語不到  
の所授<sup>一</sup>て<sup>二</sup>何れと<sup>一</sup>秘訣は<sup>二</sup>何れ<sup>一</sup>二  
子あは<sup>一</sup>およ<sup>二</sup>はる<sup>一</sup>や<sup>二</sup>はる<sup>一</sup>一我  
能治集と天和の<sup>一</sup>は<sup>二</sup>能<sup>一</sup>冬<sup>二</sup>の<sup>一</sup>喜  
と論<sup>一</sup>なり<sup>二</sup>姿<sup>一</sup>情<sup>二</sup>お<sup>一</sup>我<sup>二</sup>新<sup>一</sup>集<sup>二</sup>は<sup>一</sup>れ  
て花実と<sup>一</sup>は<sup>二</sup>は<sup>一</sup>猿<sup>二</sup>葉<sup>一</sup>集<sup>二</sup>よ<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>は<sup>一</sup>る  
け比の<sup>一</sup>炭<sup>二</sup>俵<sup>一</sup>集<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>変<sup>二</sup>化<sup>一</sup>の中<sup>二</sup>此<sup>一</sup>曲<sup>二</sup>節<sup>一</sup>て<sup>二</sup>能<sup>一</sup>治  
ハかく<sup>一</sup>と<sup>二</sup>変<sup>一</sup>と<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>る<sup>二</sup>一<sup>一</sup>ま<sup>二</sup>る<sup>一</sup>れ<sup>二</sup>は<sup>一</sup>猿<sup>二</sup>葉<sup>一</sup>の<sup>二</sup>大<sup>一</sup>任<sup>二</sup>者<sup>一</sup>  
多<sup>一</sup>様<sup>二</sup>の<sup>一</sup>巻<sup>二</sup>と<sup>一</sup>一<sup>一</sup>部<sup>二</sup>の<sup>一</sup>巻<sup>二</sup>軸<sup>一</sup>とい<sup>二</sup>ひ<sup>一</sup>て<sup>二</sup>集<sup>一</sup>此<sup>二</sup>撰<sup>一</sup>者  
の<sup>一</sup>句<sup>二</sup>を<sup>一</sup>ん<sup>二</sup>う<sup>一</sup>と<sup>二</sup>言<sup>一</sup>は<sup>二</sup>名<sup>一</sup>残<sup>二</sup>の<sup>一</sup>曲<sup>二</sup>節<sup>一</sup>と<sup>二</sup>も<sup>一</sup>一<sup>一</sup>部<sup>二</sup>の







又その節もさういふかきもあつたにさるる  
花はたゞつらつて例の家評と家評と様も花を  
論ふをれと多に事とつと詞とをいふありて様  
いありさういふ家評と花とゆゑさういふ時  
も様の家評とさういふさういふ家評の  
一味とらひらむ尾のさういふ仲のさういふと  
摘ちりてれつと連音は能言とつと

△<sup>各句</sup> 雑子鳴く 岩をねん 毒きく 花はな

け 翁自ら山中 節事あり けりてさるる花はな  
つらつて例の家評と家評とさういふさういふ花

その決り下本風はさういふありて例の名とらな  
をあれいまも様やさういふさういふ様の一子  
ともいふ仲のさういふ様電のさういふ様めらつとつと  
と何とちとさういふとさういふのさういふ

△<sup>前句</sup> 采の帰るいふとさういふ  
△<sup>附句</sup> 三層衣をいふとさういふと捨て

け附合と越の新深とつと鑑章のさういふと  
吾れやられい吾れのとつと二折の花とつとさうい  
も附句と同作の句をあれい各々の裏とのさうい  
時と例と花はなとつとさういふとさういふと







け設を越の井波より遠くはるかに付来をえりし十餘年  
 の亡名をあけて一むくも魂をまらねる若神  
 此百韻より何りされい各句を思ふ事よはさく  
 秋のむれい句花よりりてい主者此胡蝶たれて  
 つけ花の客とをそれい後の花を全くまよふ  
 一あれ花より胡蝶を二句一この格も似あ  
 るらこ花の洞とかりてけ花といふむらあれい  
 胡蝶の花此可申ある客の花たる可申ある秋と  
 まらこ花差ふとるら一言に之つけ式めはは  
 彼より例方格よりつけおの指合去嫌も

是れ射の用とんやあつてあけ設よりりあつた  
 可と方と例の再々通ちるなり

○月に日といふ事

むらうら連流りに月と百韻よりあれい  
 くよりあつて不案此例はしおぬる一  
 ろの日にいひ事といふ天象の去嫌と目より  
 百よりいげとも月次は次の詞より作者は  
 七字後も時とあらんらるるをたよのそとて  
 正附の句とて天と一をよあつぬらたれり



先格の句をあけて當時の設とあしむむ  
多うの月座よりうなふは隠見の句は  
あり

○ 霜園とあるもの神の交遷

しより秋叶 ねはるる

け霜園とせよはてて故およむる名の設あり  
しよと季の七句同じ例の月秋と断れ  
け遷交の秋季ともきこに十六七の霜園より  
唯今此月の附かくれはまよふ神の風灵はもて  
秋と向並とのをてまよふ時の念報せされ  
霜園の打越し月のあらしの林むむ川かく

はるる十句同じ月とるるの季の秋葉も  
やほく花おの月も中念あんとまよひ隠見  
の句はとあらひて

○ 八月と旗おりしるまよ幅錦

この句を中秋の名よりせしはをのんは  
月のまよとあつるむもあやほまよるおと霜園  
の秋も唯今の月を氣を言せし月とまよ  
よ古代とせらるるまよの季は二七二月のまよ  
とつら近く書座の妙用とよまよるまよ  
世等の設とねおし例のまよ通あんと我らの







かたはし執る世傳あはし二月八日と假名に  
かかれし月日といふ字世傳とあはれし月日といふ字  
音訓の議論あり今より音訓のありし月日といふ  
音に於ては一人一人の月日と訓の語録に  
かたはしききあはしとあはしと音訓のあはし  
りよとあはしとあはしとあはしとあはしとあはしと  
議論あり古おと今月おの各とあはしと秋  
ありしといふに於て月日とあはしとあはしと  
とと秋とて月日とあはしとあはしとあはしとあはしと  
け各月ある時々といふ句は秋とて七月の月

月日と他の文字とて各各とて一人一人と  
例の時ありと我徒今の議論をまゐるべし  
故あつて訓也

△母の字の音訓の月日

世傳の字を貫世金録とて母の字もあはしと  
の各とあはしとて晩年といふ字とあはしとあはしと  
世傳にはあはしとあはしとあはしとあはしとあはしと  
あはしといふ字の音訓と今世に在る月日  
あはしといふ字の音訓とあはしとあはしとあはしと  
ては月日といふ字とあはしとあはしとあはしと



あつひては雲の折返しは美なるの月とあ用ひ  
 一とむきうつる月のふらふと秋のまきとさうしと  
 け今と他と月のまきと一と花のふらふと句の返論  
 をとらふとさうと古歌より母のふらふと裁入て  
 あつひとまのあつとつれとまのまのつらむと論  
 ちとれと物と論とつらむとまのまのつらむと論  
 と句との返用あつれとまのまのつらむとつらむと  
 月夜星花散とつらむとまのまのつらむとつらむと  
 一世の愛護あつと一と花と一と月夜星花とつらむと  
 一から花あつとつらむとまのまのつらむとつらむと

○ニむれ月花事

世は傳ふ花散の式と月夜と指合あつて次の傳句  
 一月とゆつる時と月ととあつとつらむとつらむと  
 一と句と附方めつらむとあつとつらむとつらむと  
 一連能のうたはとつらむとつらむとつらむとつらむと  
 一指合のうたはとつらむとつらむとつらむとつらむと  
 一とさつとつらむとつらむとつらむとつらむと  
 一移員とつらむとつらむとつらむとつらむとつらむと  
 一まうに懐帯と載とつらむとつらむとつらむとつらむと



かゝる時今世附なるとかて次は向ふ月と  
 (ま)ふさふさ今世附(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 お向ふさふさと(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 と(ま)ふさふさを例の(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 月と(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 前向ふさふさと(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ

掃地。せはせは(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ

△ (ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ

△ (ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ

と(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ

はれお向ふさふさと(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 と(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 と(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 越向と(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ

△ 踏(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ

△ 向(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ

け月と(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 一解(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 向(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ  
 下(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ(ま)ふさふさ



かりて次の月といふはさういふに多にはる附き  
の類いさういふ人といふにさういふの端也  
のいね月といふはさういふに裁入あり月  
といふといはれといふと裁入の向はりて  
二句の向はらうといふ附きの我法と移ま  
る次は月といふ向はらうといふ

ちらうといふは裁入の向はらう

未だはらうといふの向はらう

△ 年といふは裁入の向はらう

素性の向はらうといふ

さういふは裁入の向はらうといふに多にはる附き  
の類いさういふ人といふにさういふの端也  
のいね月といふはさういふに裁入あり月  
といふといはれといふと裁入の向はりて  
二句の向はらうといふ附きの我法と移ま  
る次は月といふ向はらうといふ  
ちらうといふは裁入の向はらう  
未だはらうといふの向はらう  
△ 年といふは裁入の向はらう  
素性の向はらうといふ  
さういふは裁入の向はらうといふに多にはる附き  
の類いさういふ人といふにさういふの端也  
のいね月といふはさういふに裁入あり月  
といふといはれといふと裁入の向はりて  
二句の向はらうといふ附きの我法と移ま  
る次は月といふ向はらうといふ  
ちらうといふは裁入の向はらう  
未だはらうといふの向はらう  
△ 年といふは裁入の向はらう  
素性の向はらうといふ



より老の經氣と耻合する月の働をばらけ  
てしる名の具合を神助とす

△ 干物と云れり云々入ぬりきり  
けと云々月此お

け附方と染候の両用して干物と云と干物  
と云る一干物して云れ月附方干物の  
かゝおと云るの備せる程あれおぬと候  
を云ひあつてと云れと云物此言と云  
と云れつと云るよ同云と云一お後二おの凡削と  
云くは云と削のよ垂二化なる

○ 月の二子と見此事

け格とあつてと云れ月のおふり或はお方  
の指合つ或と天象の法嫌と月月の月と云  
あり畢竟と月と云と陰と見見と云  
也見はは漢家と云つて又の云る名月  
あり月と月と云と云

△ 秋之川や朝日汝此星と云  
はらくねの星と稲の  
姨捨の言と云神と云



家より小倉向服中を二平仙の表合せられ  
 朝日の服へのこと一月をむつてくす  
 下四半に指あはれを二平向表の  
 中へ向せ二平をいふあはれを二平に  
 各とわけて月の伴とあはれを二平  
 と花といふ文科と月といふ二平の  
 あはれを二平といふあはれと二平  
 なる山田の形容と称を二平やま  
 といふ二平といふ文科といひて  
 論ふれとあはれを二平といふ  
 二平といふ文科といひて

の眼力と云々をいふ一月とあはれを二平

あはれを二平といふ 二平後川

あはれを二平といふ 二平

あはれを二平といふ 二平

あはれを二平といふ 二平

け接れを越えぬと云はれ川に二表を制す  
 此と此はやうに表をいふはれを二平  
 ありあはれをいふはれを二平  
 又の目とあはれをいふはれを二平  
 佛ふと云はれ表をいふはれを二平







論多し或は祝言會といひ或は哀傷席に  
 了時をおひむね宗匠の各句あれ各段のむ  
 とし宗匠よりむせむれ各句はむね  
 あしむむ花とあふらふれ或は一所の老人  
 う或は親族の御者よりむむ一しらのと一まの  
 始終と御少のむむと今此能席よりむ  
 奉句とす下此場とおちしてむとて我は  
 事をもく人しむとむとまはらむと一果たるは句  
 ともひたれとらると一所の能滑とて或の  
 論ら及りともむ一むむも保束の能滑とも

一執事と一祝のとりとありて各案の之句一執事  
 とて一祝の各句も一執事ともかゝるる略美  
 一論及びりてくれ祝言哀傷の各句は  
 祝言哀傷の各段のむとむむり新用のむね  
 あれ一奉句は各句の服しかりとむむ花の角  
 ととあふむも或は貴客高客を新て  
 時々ありて一所の能滑と各句ともむむ此段あり  
 一各段のむとよのほれあむむ一奉句は一所の  
 そ尾あれはありて各句の所とよあむむむむあ  
 一と一合りむ書とあり一むむ一法園旅同字の



時節よりたまある年湖南北新風よりあそび  
各句 七浦やここのこゝとここのこゝ

△ 各句 西原の剛毛よりつれハ系

されいも時世浮論よけ各句と林よ夏夜  
るしかなら新風の式とあそぶ名取の雑の  
各句よも他あそびよも高き此服とけ  
て四季格とよよもあそびよも服と  
算しはてやうとよも各残のむもつりて  
各句のわよよも支配とよもあそびよも例の  
よのほねの教むあつとよもはれと各句の世家評

よふけをえのはねあつたよも各句よも一毎のらる  
あつとよもあつとよもあつとよも七浦のあつと  
とらつとよもあつとよもあつとよもあつとよもあつと  
とあつとよもあつとよもあつとよもあつとよもあつと  
とあつとよもあつとよもあつとよもあつとよもあつと  
とあつとよもあつとよもあつとよもあつとよもあつと

△ 他諸と今人偏のむはらま  
面白頬面白目面白はえはら

○ 隣アたまもよもあつとよもあつとよもあつと  
二扉凡のたよもあつとよもあつとよもあつと

け二連とよもあつとよもあつとよもあつとよもあつと



古尺竹のあつとひあつて竹の百節の挙げのあつと  
はつと我家のむねととく人偏の能借とと何れ  
とれとつととと何れ頼向此拍子かけつと  
一ちて此用ありとつと後と後と後と後と後と  
とと変化の中此曲節つとつと各残の花とつと  
とれつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
ぬと何れとつとつとつとつとつとつとつと  
とつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
事一今一此のそとととととととととととと  
とつと此用ありとつとつとつとつとつとつと

○ 書季と物名此事

古抄の書一此屏風つとつと此舟の百節とつと  
とつとあやあやとつとつとつとつとつとつと  
つとあるつとつとつとつとつとつとつと  
と論あつと難と用と書季つとつとつとつと  
あるつとつとつとつとつとつとつとつと

△ 附句  
折かつとつと梅が宿のほき信  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと







く各句せそそ此顛倒の用とすよと香稻粒くとい  
 碧招枝とて粒と枝とあそい用多きを  
 りて顛倒のばとめらゆきとぬく錯綜顛倒  
 もあれと世に事及とありてみせとるを  
 杜律の諸おし錯綜顛倒のばとめらゆき  
 の扱はる及とるを覚半句に接とるよけ松陰  
 の懸酔のばとめらゆきとや專も鈴も松陰と  
 結語と此れ一字とありてと代はははの七月  
 一とる一とる多しとる文代も句格もあつて  
 とこの心ふはつてと句と字と用中用あれ

いそつたてそのよはは格の用とすよとい  
 一とる句作のす用とるんははとるあは物  
 あつていよ一とる句作のす用とるよとる

○ 一とる字とる語此事

むしとる一とる字とる語の格と和漢と語と  
 あれと所合よけ格と用ゆらつておしと能格と格  
 とやとる一とる字とる語の格と和漢と語と

- 藤代柵ニセキ 一とる字とる語
- 藤代柵ニセキ 一とる字とる語



是れはあまの附合しつゝも武蔵と名をいへる句を  
 けしつゝ時の口譯しけ附をよ句のりくまのしつゝ  
 おまといふあしつゝかへるまうしつゝ附をらむ  
 けまらあまの情と起しつゝあまのりくまのしつゝ  
 の起格はあまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 の附合とあまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 といふまのりくまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 の附合とあまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 といふまのりくまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 今世新制とあまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 といふまのりくまのりくまのりくまのりくまのりくま

ある人の附合よ

△ けしつゝあまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 名をいへるりくまのりくまのりくまのりくま

け附合と名残の曲あまのりくまのりくまのりくま  
 詞のあまのりくまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 の附合とあまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 といふまのりくまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 能階の弟了りつゝあまのりくまのりくまのりくま  
 △ けしつゝあまのりくまのりくまのりくまのりくま  
 けしつゝあまのりくまのりくまのりくまのりくま



つひの口傳しきりてわくとる流の格とやらむ  
されけ比の能は果しけ格とやあるまじく或ら  
低句よりさる句よりさるあり附合とたね  
し附りおあしき句より低句よりさるし一語流  
の拍子よりいあれせられとさるの句せよさる  
お句とあましきる時とさる低の論及及さる  
け格とたねとさるし一

○ 越向一し句作とた事

中右と連流の各句も附句も越向と句作とた

差ふふたれの教中人もさる時あましきりてさる  
者しと論しきりてふけぬし我りとの越向とさる  
し執中流ありし越向とさるし一も體とけり  
や打越より二なるた事とさるも句作とた  
し一し用と窺ひお句のさるたとさる  
さるさるの各句と附句とさるし一もさる  
の控せらるる白馬の類説しけりし曲節地の之様  
也

- 才の如く  
幸崎のねとまのお解と  
幸崎のねとまのお解と



けみりくと湖南の春らまゝして白馬と一條の秘訓を  
ある時本層寺に夜話しぬおと書子、難談集  
と語りし彼ら幸崎の松此論談と云れい。と哉と  
の通用とあげてゐる。ぬの池文と云われたる  
い許林の通答書よりして理非決断の事と似てん  
と云らる。彼らおと書子と此らのさねのむと云れん  
も幸崎の書と概して面白くんと云てて哉と  
と決まると。とでと疑りきるといれんの類説と云り月  
の山月はくり誠と云ふ。未決の中此決辭あるもや  
むよりねとと決まると時を和歌にも偏むといひたる

よーさねのむとが此益國よりや幸崎のねと  
おめ和歌よりあられいさといふ。と云れぬと  
と曲節あるおと書子と云る。と云りけふ之様  
と口深あつと。やと云れいおのむのかくのそく  
附るとありて戸様ありや。懸向と例の只一より  
自作と曲節地の之様より。或は真竹行といひ  
或は不易流りといふ。各目と中次女万客あり  
と此らある人此不堅とある。いして屋茅の宿の益  
と孫簾といふ。服と牙之を他とてゆく海  
にとのく探め字此佛と云れい。例の懸向の歌八



くはくは向作と秋此接おあらんうら

<sup>曲</sup>あ入の子に大各此秋咲く

△<sup>節</sup>あ入の子に隣く秋咲く

<sup>地</sup>あ入の地をよりの秋咲く

かく之様の向と作りて二所の家評とくかふに

お月くを隣の家とく移しひらぬらん大各

秋もく之れとけりと二所此能滑あれと奇言

新語と好むまよあくとり弟と門の秋

さくおらぬらん主層此夜話とおよひて秋

秋の之様と案とくに別あ入の地をよ秋起

つと作し前のうらよはさうてすゆ一々れ起

の備と地と曲とよはされて奇怪を教ふる

まらんしらの秋とく中合ふる例の二所と

人あしなむやおらり耳同とあしむと

いあ白此改め格と失りまらきとひ同と

可しひらまらもはねの人うてはねの言と

信評事話とくあよとくる白馬の遺訓と

ららんはさなると一他滑の世はあれ人

藝ケハレ睦の用とあうて藝とて負服とてあ

い睦とふとあしむる節あ起縹子論と



きくあしはねの糸綿のまはらむしり  
と真なる人の感なる人しはらむ

○ 附合し七名八辨抄事

中流より和歌の十辨より連歌の十辨より  
附方より多くあれとし彼らと艶詞と情をい  
ふと平詠と清和とよある故に連能の清和  
の是なり一歩千里のまはらむとありて名に解  
用の異ありとある一はよく我門の能清の  
と七名あり附方より八辨ありて各目をとる

十又條ありしより事方にて各とと才と有心附  
とらひる歌と念歌といひて次と題句とつ  
白馬とよきけことと事方のみとらむと  
あうと和歌と十辨と細名あることと或は起情  
とつひ向附とらひ拍子と句をよむ今歌の標拍  
とつとまをうとや名とあれとまきり歌文の十論  
とあり重化語とつ合と一とあるは七名抄事  
と對附とらむ事方あれとつと曲節の意  
とつと名式の各とらむとあかす一と終るに  
比あるかす一と各條の裏に曲節と



高ひ此功者一家を打つて

親の位牌も存せ 表見世

△  
されは古儀の對附とつふは 老保めを此極と  
し申子に孩の禮と附くるとを子對とつひ意  
對とつひ後も膝向の如例あれし今子親と  
子此對とつ所の高ひの表<sup>ラモシモ</sup>店も存せ此極の面側<sup>ラモシモ</sup>  
を對して全くある此等ふれし詞いふ對とい  
あうことを例のする一事といふまはれし此練の  
事此事らつひからの害あしうしとてと曲節此  
秘授とらつて 世より古儀の對附と今子新

製の對附と此所なだのままれとおさるし  
所子附方の八辨とつて人とおふ此も後を所  
衣食合負福のふとてつけてまはるる有心の  
附方とまらつくも物をあふ此東洛山海より  
家内と家外のまをいしてつけておぬくし年終  
の附方とまらし一町分とて晦朔を夜より朝  
の晴の所法とつひ町節とてまはる秋冬より  
節供正月の行事とつて二辨と多用ありて  
或は有心の附合もあるて或は年終の附合  
もあるし一まらるに町節の二辨とて世より附







ひいさし目とぬきいしははにぬきしははの  
ほいころせしん所着此辨ふれい人し教ふよき  
一丁例のふ式よらまかきしきまら

障子ふぬめのタリ ちりてく

△ 智算殿とこれそし老の目と接い

け白に二座のふは神と意よよあらうふぬめのふと  
神ととそと文日のうらひより障子に本所の  
おとえゆくと附白と打奉の座なとてこれい  
知算殿と我白世作とやうむとまねたしけぬ  
こぢやくよりまをせて人のま眼くらぬとふれと

お算のいん巻とつよまきよや格まれの世傳の附合  
い起佐のあま方よし似あしうまに目とぬきけい  
お算せえゆらより作をぬめちりてくよふし老  
の目ぬらふとをあらせてはははにあらとはは  
きん早竟とせしん所着うてし後よてふ  
離附の二変より空接の注のいはいぬとまは  
おし我の家は今末よ事書方と附方此差ふと  
一所の附合しむよ時よ了と打敷より二ふの  
まといとふ合せ次よ折のまをとあき次し我  
白世おし附き一介白の配とあまと一かくを我



増とあまゝをなすなまを有心の命歎の但  
道場の遣言うと七名の當用とおもひ  
も始とおもひなりけりけりけりけり  
よ其人の其場の所不とまり天相の能  
をちとせりおのれ用と作る故よ  
いつり志うれの事方と附方と  
事一と事と口は附方なりけり  
ふあれと二名一解とまり  
そふ對附しけり空控も古  
おのれ今此新製なれは  
附合

のそむ時をかきとて夏海のみ分より  
自己の左記とていへり

○懐常の各月事

おのれ連能の二名とていふと百弱と  
てけをとていふと百弱と  
二万とていふと百弱と  
のちのひとていふと百弱と  
の折とていふと百弱と  
向とていふと百弱と







その例のりよ格のあうし種を祝言のひしきと  
いふしつ句の各同の風流ありしるは十八音の  
歌合よりそ世談人と音のあうしつ多ふと下  
の句とあうしつ二十六の各とあうしつは  
月花も二折の式あれしつ十二句とせうは  
今式より二花二月の例ありしつ式の遺訓よ  
る各とあうしつは時宜あり或は納  
の流を祝し或は歳暮歳旦の賀よは如教と  
あうしつはあうしつはあうしつはあうしつは  
そ尾と合をうしつ月花の二折とあうしつは

たうしつはあうしつはあうしつはあうしつは  
あうしつはあうしつはあうしつはあうしつは  
とあうしつはあうしつはあうしつはあうしつは  
の新製よりしつはあうしつはあうしつは  
の時宜の常用ありあうしつはあうしつは

○ 求約の俳諧の向教此事

夏は俳諧の求約よりあうしつはあうしつは  
かりしつ和音此事はあうしつはあうしつは  
故年の生る前よりあうしつはあうしつは











六八と用中しく身位と短身と求初の程と云  
（まも右の足ふと求初の程おまきあり）按  
まれの程の通うて能階の字も同し候  
也

○同季よと句去まやれ事

たよりおほの能階も同季と云るまれば立代  
あれと云ふはしくおと云ふはつてと云ふは  
いふるはるしきう今能階の者はよま秋といふ  
はるよおまらるるはと云ふはと云ふはと云ふは  
のまお階のまはと云ふは例のちたてと云ふはと云ふは

のたんと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
あつても一と云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
はと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
月花のまはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
此物免と古例と云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
ゆつと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
い論と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
と云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは  
かまらと云ふはと云ふはと云ふはと云ふはと云ふは

古今抄

四二







話さす。或は雨夜の密談とて遺行のほ  
 くよさるる。今よ亦の凡例とありて百世の  
 傳ふこととて。利にたねるの滅後と  
 して。東鑑西鑑の日用とて。高時  
 といふ者の授論とて。衆ひて永く傳ふと傳  
 へて。そまて。弟子に伝ふる。一。まねる。吾  
 へ。多し。而。識。と。あ。る。も。例。の。一。以。世。具。と。て。了  
 百。前。一。夜。の。沙。り。と。も。て。千。亦。一。カ。レ。の。節。と。名  
 へ。ら。る。者。と。多。し。す。用。と。ま。り。ま。ね。る。者。と。例。の  
 有。用。と。傳。ふ。よ。一。一。ま。ね。る。一。カ。兩。断。の。場。ち。り。也。

此を二つとけ一冊とおぼくを。故の二とあり  
 一カレ一例の沙り。又あれとおぼく。自己に  
 する。相ある。ん。と。彼。子。授。論。の。齊。と。お。ぼ。く。を  
 例。一。夜。の。密。談。と。り。一。世。の。衆。議。と。り。ま。ね。る。一  
 用。伝。ふ。一。百。世。の。傳。ふ。と。り。お。ぼ。く。の。事。也。

東鑑卷五之五終



能階在とお

跋

渡部

いし一（孔子の家語）子夏向孔子曰、顔回  
 之為人、奚若、子曰、回之信、見於丘、乃至  
 子路之為人、奚若、子曰、由之勇、見於丘、  
 子夏敬、而向曰、然、則四子何為事先生、  
 子曰、回能信、而不能及、乃至由能勇、而不能  
 怯、勇、四子者、之有以易、吾弗與也、此其所  
 以事吾也、云々、これ、子路も顔回も孔子に及ぶ

而も真言と云々の近詐をばき、勇があるといふ  
 憶病ありて終に孔子とるる子あつて、これれ  
 を瞻前忽後と讃いて、顔回ひとりよく  
 知れとも、惜哉、不幸短命ありて、孔子のるる  
 傳くとも、子夏も、おもしろく、今此能階とて、  
 赤目楚秦漢のむらり、二千余歳の、  
 を揮く、あるとて、く、新むとて、  
 断つとて、さるる、人倫の常性、の虚しく、  
 武階の世、  
 武階の世、  
 武階の世、



了能信の二虚言し自在とゆふより能信あねと  
 し信ときそれ中より能勇あねとも勇ふたふも  
 きとくは孩児の親ときとふくこくも徒とてふ  
 人とえんひ弟子とてとつり抱あねれり  
 日本六千余冊とせむと移とてつふお新  
 此れきし性の人少あひて人の及さるおあねの  
 ありしはつ能信と俗談事話とておあねの  
 不いむとそふ人きく俗談の中へあんたねの  
 事話とて凡新あふも凡新あんと類とれを  
 尻入りの耳とてさうとせむの可はありて

或と長く或と短くそそれ自由あつらる  
 けり人の心お痛とありてそのれをゆめく  
 といふ余所の耳とて能あねとそきく白馬の  
 誠むかふとてさる者として能信とて  
 高くあねとて能信とて高くと新とて俗と  
 俗とて新とて常ある人とてさる者かて  
 大なること新とて能信とて能信の二語とて新俗  
 一樣の傳言あるとて人の及さる不あんとてや  
 けねよけ或と人の及さる不あけて近くと  
 の裏面より遠くと一世の裏面とて能信とて



更入百世此の墨と坊とありし

享保庚戌之月日

# 書目林

京寺町二條

野田治兵衛



俳諧書目籍同録

獅子庵遺稿

本朝文鑑

假名文集  
全十卷

和漢文操

假名真名文  
全七卷

俳諧十論

新古今評論  
全三卷

十論及辯抄

十論秘説  
全二卷

新撰大和詞

日本助語辨  
全二卷

和漢百花賦

大和真名文  
全一卷

俳諧古今抄

再撰真名式  
全五卷

論語先後抄

大和真名註  
全四卷



